間もなく、雅楽が奏でられ、緋色の衣を着け、柄のある袴に、金色の縫い取りのあるきらびやかな前飾りを身に纏い、仮面をつけた「陵王」の舞手が姿を現しますと、これまで静かだった参拝者の中から、待ち構えていたカメラマンたちが、一斉に立ち上がりました。

「陵王」は、唐楽で別名「蘭陵王」と云い、昔、中国の王が戦場で軍の士気をあげるために、仮面をつけていたが、大勝利をおさめ、その時、喜んだ兵士が、この曲を作ったという。また一説には「没日還午楽」ともいわれ、王子が父王の陵前で苦戦を嘆いたところ、沈みかけていた日が再び昇り、勝利を得て、この曲を作ったという故事による。（邦楽百貨辞典・雅楽より）

納曽利の舞

「納曽利」（ナンソリ）

「陵王」の舞に引き続き舞った「納曽利」は、「陵王」衣が緋色であったのに対して、すべてが地味に装い、竜唐織紋のある毛縁の装束で竜を模したお面をつけ、後頭部は緑色の地に金糸で縫いとりのある布で覆われ、上着は、橙色の衣を着けています。

「納曽利」の舞は、竜が楽しそうに遊ぶ姿を舞にしたものと云われ、古えには、競馬や相撲の勝者を祝って奏でた曲ということです。動きがとても軽やかでしたが、曲の一部は何となく、もの悲しい旋律を奏する部分があり、概して厳かな雰囲気が漂っていました。

辞典によると「陵王」が唐楽であるのに対して、「納曽利」は高麗楽であり、「納曽利」は、最高傑作であると記されていました。

「納曽利」の舞手が上手の幕に消えて行って、大きな拍手が起こり、暫し鳴り止みません。参拝者は、これら二曲の舞楽に酔いしれて、身も心もひきつけられた風情で、それはまたそれで印象深い光景でした。

舞楽が終わった後で、地元の代表の方が大宮本殿の前で玉串奉奠をされた後に、拝殿にいる参詣者が御幣拝戴（お祓い）を承けました。その御幣拝戴とは、長さ一㍍を越す大きな御幣を持たれた「厳島神社の野坂元良宮司」さんのみまえで一同は、頭（こうべ）を垂れて順を待ち、前列から席を入れ替わって、拝戴を承けました。

御幣奉戴（御祓い）
（野坂厳島神社宮司）

引き続いて、流鏑馬の神事を拝見。狩衣を纏った騎手が馬に乗り、社殿の前で天地の四方、六方に矢を放ち、厄除けをする神事で、地御前神社では江戸初期の頃から、他の神事と共に行われてきた行事と云われる。それから社殿の前で三回ほど馬で廻って、社殿入口の鳥居の地点の的に向かって矢を放つ。うまく的に的中すると威勢のよい歓声があがります。しかも一㍍程の距離を三度も往復するというので、馬も騎手の方々も大変ご苦労なことであろうと思いました。中には、馬と共に旧道を歩く人もいますが、大体の人は神社の前で馬が戻ってくるのを、辛抱強く待っていました。

流鏑馬は、平安時代に宮中で行われていた端午の節句の行事で、ここでも馬を走らせ、